

# 明治維新一五〇年の否定から 出発する新生日本

東京大学名誉教授  
つきおよしお  
月尾嘉男

## 日本を大國にした明治維新

今年が明治維新一五〇年である。幕末から明治政府成立までの経緯についてはさまざまに詮索（せんさく）されているが、新生政府が実施した政策が日本を大國にしたことは確実である。富國強兵を推進していなければ、多数の東南アジアの国々のように西歐諸國に支配されていたであろうし、殖産興業を推進したおかげで一九八〇年代には世界第二の工業大國になることにも成功した。文明開化は近代

国家として必要な社会基盤の整備を可能にした。

この経緯を明示する「マジソン・プロジェクト」という統計がある。世界の約一五〇か国の国内総生産を過去二〇〇〇年間にについて調査した労作である。これにより、日本の一人あたり国内総生産を外国と比較してみると、明治時代には欧米諸國が日本の三倍から五倍であったが、次第に日本が肉薄し、第二次世界大戦の敗戦によって一旦は格差が拡大したものの、一九八〇年代に对等にな



る。ジャパン・アズ・ナンバーワンの時期である。

## 変化に対応できない日本社会

しかし、最近の様相が一変してしまった。日本の栄華の残光があった

一九九二年の世界の企業の時価評価総額の上位二〇社には日本企業が八社登場していた。しかし四分の一世紀後の二〇一七年には日本企業は上位から消滅し、上位五社はアップル、アルファベット、マイクロソフトなどアメリカの新興情報企業、六位と八位はアリババとテンセントという中国の新興情報企業が躍進し、日本はようやく三九位にトヨタ自動車が登場する。

## 栄光の否定が再生の必須条件

報は相違していることに価値があり、結果として情報社会は多様が最大の特徴となる。二〇世紀初頭、日本はモノを生産する一次産業と二次産業の就業者数が全体の八割、サービスや情報を提供する三次産業は二割でしかなかったが、現在、前者は三割、後者が七割である。社会の根底が転換したにもかかわらず、その変化に対応できなかったことが衰退の原因である。

この状態を多様に転換していくことが必要であるが、幸運なことに日本には多様な基盤がある。第一は自然の多様である。一例として、日本には五五六二種の植物が繁殖しており、約三六％は日本固有である。類似的の島国イギリスは一六二三種で、固有は一％でしかない。その自然を反映した文化について、日本ではユネスコの無形文化遺産に二五が登録され、世界二位である。これを基礎にした多様な社会を実現することが課題である。



いかに時流を読み、巨大転換に適応するか。「100年先を読む」シリーズの2作目となる新刊『幸福実感社会への転進』好評発売中です。

ご注文は巻末のハガキか、オンラインショップからどうぞ。

この激変の理由は明確である。明治政府の政策に共通することは、日本を画一にすることであった。江戸幕府は全国を統治していたものの、実際は二七〇余藩が独自の制度、経済、教育などで地域を維持する分権国家であった。しかし、明治政府は法律、通貨、教育、言語などを統一し、日本全体を集権国家に再編した。これは工業時代には格好の政策であった。近代工業は企業が同一製品を大量生産し、民衆が大量消費する仕組みだからである。

一九六〇年代に政府は全国二〇か所以上に鉄鋼、造船、化学などの産業を立地させる基地を造成したが、大半は期待する結果に到達しなかった。以後もテクノポリス、国際会議観光都市などを政府の音頭で実施したが目的は達成できなかった。現在の政権の主要政策に地方創生がある。しかし、現実には中央政府が枠組みを設定し、そこに地方政府が応募して合格した提案に資金が配分されるという集権国家のままの仕組みで推進されている。

魚類が全盛であった四億年前に陸地に上陸するという冒険をした両生動物から現在の多種多様な生物世界が展開した。現状からの脱却が発展を約束したのである。明治維新も二六〇年以上持続した安泰な過去の否定によって日本を大國にした。そうであれば閉塞状態の現在の日本を再生するためには既存体制の否定が必要である。明治維新一五〇年を祝賀するのではなく、否定することによってこそ多様な日本へ再生できるのである。